

一字漢語サ變動詞形成漢字の用字法

——古事記と源氏物語を比較して——

柚 木 靖 史

はじめに

平安時代の物語に使用された語彙は和語が基調となつて
いるが、同時にまた多くの漢語も使用されている。その中
には、漢語サ變動詞として使われる漢語も多く含まれる。

一字漢語サ變動詞¹についていえば、源氏物語を例にすると、
「念」「奏」「具」「誦」といった三十六種の漢語が認められ
る。これらの漢語は表記のうえでは、漢字一字に相当する。
ここでは、このような漢字の一群を、一字漢語サ變動詞形成
漢字と呼ぶことにする。これらは、動作性の意味を有する全
漢字からすれば、ごく限られたものである。このような漢
字は、どういう過程をたどつて、漢語サ變動詞となる資格を
得たのであろうか。例えば、「恨」という漢字と「怨」とい
う漢字はどちらも「ウラム」という和訓を有していること
からみても、類似的動詞の意味を共有しているといえよう

が、平安時代の和文では、「怨ず」は使われるが「恨ず」は
使われない。それは、なぜなのだろうか。ここで、漢語と
しての定着度ということも問題になつてこようが、それに
しても「怨」（ゑん）が漢語として定着し、「恨」（こん）が
定着しなかつたとすれば、それはなぜなのだろうか。また、
いつごろから、どのように、「怨」は漢語として定着して
いったのかなど、様々な疑問が生じてくる。これら多くの
問題を、本稿のみで説明すべくもないが、これらの疑問を
発端にして考察に入っていくことにする。

さて、平安時代よりも前の時代、すなわち漢字のみで文
章を書き表していた時代において、やがて漢語サ變動詞の
資格を持つようになる三十六種の漢字は、どのような使わ
れ方をされていたのであろうか。漢語サ變動詞としての使
い方につながっていく何らかの兆しが認められるのであろ

うか。これを、古事記でみていこうとするのが本稿の趣旨である。

一、源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字と古事記出現漢字との比較

まず、源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字の種類と出現数をみておくことにする。管見に入った限りにおいて、字種は資料1に示した三十六種である。出現数の多い順に上位の五種を示せば、「念ず」（六十七例）、「奏す」（六十例）、「誦す」（四十八例）「具す」（三十六例）「怨す」（三十四例）となる。つづいて、これらの漢字が、古事記にも使用されているかどうかをみたのが資料2である。これを見ると、三十六種中、二十種が古事記にも使用されていることがわかる。ただし、そのうち「難」と「先」は、それぞれ古事記にも使用されているものの、日本古典文学大系ではそれぞれ「カタシ」「ワザハヒ」（難）、「マヅ」「サキニ」「サキノ」（先）のように、動詞として読まれた例はないので考察からはずす。このように三十六種中、約半分の十九種が古事記に出現し、しかも動詞として使用されているようである。（以下、テキストとして、古事記は日本古典文学大系を、源氏物語は源氏物語大成を使用した。）

【資料1】 源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字の出現数一覧表

服	按	孝	調	念
1	1	3	15	67
用	要	辞	制	奏
1	1	3	12	60
論	勘	拝	請	誦
1	1	3	8	48
和	感	秘	信	具
1	1	3	7	36
	死	対	臆	怨
	1	3	6	34
	動	弄	興	屈
	1	3	4	25
	難	先	困	領
	1	2	4	24
	襦	練	講	啓
	1	2	3	15

【資料2】 源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字と古事記出現漢字との比較

請	調	領	怨	誦	念	源氏物語	古事記	備考
○	○	×	○	○	○			
コフ マラス	トノフ (ミツギ)		ウラム (ウラム)	ヨム	オモフ			
信	制	啓	屈	具	奏	源氏物語	古事記	備考
○	○	×	×	○	○			
ウク (マコトニマコト)	オサム			ソナフ (ツブサニ)	マラス			

臆	困	孝	拝	対	先	按	勘	死	難	服	論
×	×	×	○	×	△	×	×	○	△	○	○
			イック ヲロガム		(サキニ マツ) サキノ			シヌ	(カタシ ワザハヒ)	ケス (ミソ) キル	アゲツラフ
興	講	辞	秘	弄	練	要	感	動	襦	用	和
○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	○
オコス オコル		イナブ					メヅ	トヨム ウゴク		モチキル モツ	ヤハス

(注)

○ 源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字が古事記に認められ、しかも動詞として使用されていることを示す。

× 源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字が古事記に認められないことを示す。

△ 源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字が古事記にも認められるが、動詞としては使用されていないことを示す。

備考 日本古典文学大系における読みを示す。このうち、丸括弧に入れて示したものは、動詞として読まれていない例である。

尚、資料2には、熟語として使用されたものは含まれていないので、別に示しておく。

怨(恨怨) 具(喪具) 辞(旧辞・辞理) 死(死人)
先(先紀) 信(比古布都押之信命) 調(御調) 服(服屋 服織女 衣服 婦服 呉服)

二、古事記における用字法

ここでは、一字漢語サ変動詞形成漢字のうち、古事記に

も使用例が認められるものについて、それぞれの意味用法を考えていくことにする。

1 念^②

源氏物語に、「念ず」は六十七例認められる。そのうちの二例を次に示す。

①いと心あはた、しければ、かわのみづをあらひて、きよみづのくわんをんをねむじたてまつりても、すべなくおもひまどふ。(夕顔 大成135頁7行目)

②御心ちいとくるしきをねんじつ、おほしおこして、この御いそぎはてぬれば、三日すぐして(若菜上 大成104頁11行目)

①は、観音が行為の対象となる例で、ここでの「念ず」は「祈る」という意味である。②は「御心ちいとくるしきを」が行為の対象となる例で、ここでの「念ず」は「我慢する」という意味である。これに対して古事記では「念」が、二例認められる。

①妾已妊身、今臨産時、此念、天神之御子、不可生海原。故、参出到也。(144頁1行目)

②自其地発、到当藝野上之時、詔者、吾心恒念自虚翔行。(218頁10行目)

①の例は、海神女が心の中で思うには、「天神を父とする子は海原で産むべきではないので海原から出てきた」という内容である。ここでの「念」は、単に「思う」という意味であるとも考えられるし、「精神を集中して思う」という意味であるとも考えられる。もし、後者の方であるとするならば、源氏物語の「念ず」に近い意味となろう。②の例は、「私(倭建命)は、平素から、歩くのはもどかしいので、空を飛んでいこうと思っていた」という内容である。ここでの「念」も、単に「思う」の意味でも解釈できるし、「精神を集中して思う」という意味でも解釈できる。この二例だけでは、古事記の「念」の意味をいずれとも判じがたい。もし、「念」の意味を「精神を集中して思う」と考えるなら、源氏物語の「念ず」との共通点を認めることもできるのであるが、それにしても古事記の「念」には「観音」「神」(信仰の対象)といったような語を対象にする使い方や「病氣」や「災難」(苦しみの内容)といったような語を対象にする使い方がないことからすれば、古事記の「念」と源氏物語の「念ず」の意味には隔たりがあるといえよう。^③

2 奏

源氏物語には、「奏す」は六〇例認められる。そのうちの二例を次に示す。

① 日々にをもり給て、たゞ五日六日のほどに、いとよはうなれば、は、君なくくそうして、まかでさせたてまつりたまふ。(桐壺 大成8頁6行目)

② 日やうやうくだりて、がくの船ともこぎまひて、調子どもそうする程の、山かぜのひびきおもしろくふきあはせたるに(少女 大成704頁6行目)

「奏す」には、「天皇や上皇に申し上げる」という意味と、「管弦を奏でる」という意味とがある。前掲の用例のうち、①は「更衣の母君が桐壺に対して申し上げる」という内容で、ここでの「奏す」は前者の意味であり、②は「調子を演奏する」という内容で、ここでの「奏す」は後者の意味である。一方、古事記には、「奏」が二十二例認められる。

① 乃媚附大國主神、至于三年、不復奏。(112頁8行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

② 所遣葦原中國之天菩比神、久不復奏。(112頁10行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

③ 於是天若日子、降到其國、即娶大國主神之女、下照比

売、亦慮獲其國、至于八年、不復奏。(112頁14行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

④ 天若日子、久不復奏。(114頁2行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

⑤ 汝所以使葦原中國者、言趣和其國之荒振神等之者也。何至于八年、不復奏。(114頁5行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

⑥ 故、建御雷神、返參上、復奏言向和平葦原中國之状。(124頁9行目) 【行為の及ぶ相手 高御産巢日神 天照大御神】

⑦ 今、天津日高之御子、虚空津日高、為將出幸上國。誰者幾日送奉而覆奏。(142頁3行目) 【行為の及ぶ相手 綿津見大神】

⑧ 如此平訖、參上覆奏。(184頁13行目) 【行為の及ぶ相手 崇神天皇】

⑨ 是以各和平所遣之國政而覆奏。(186頁3行目) 【行為の及ぶ相手 崇神天皇】

⑩ 其軍士等、還來奏言、(194頁2行目) 【行為の及ぶ対象 垂仁天皇】

⑪ 於是覆奏言、(200頁4行目) 【行為の及ぶ相手 垂仁天皇】

⑫ 故、如此撥治、參上覆奏。(210頁12行目) 【行為の及ぶ相手 垂仁天皇】

景行天皇

- ⑬ 御子者、所遣之政遂応覆奏。(214頁5行目 行為の及ぶ相手 景行天皇)

- ⑭ 於是其國王畏惶奏言、(230頁10行目 行為の及ぶ相手 仲哀天皇)

- ⑮ 三人議而令奏天皇云、(274頁7行目 行為の及ぶ相手 仁德天皇)

- ⑯ 如此奏時、天皇詔、(274頁10行目 行為の及ぶ相手 仁德天皇)

- ⑰ 是以速總別王不復奏。(276頁11行目 行為の及ぶ相手 仁德天皇)

- ⑱ 令奏天皇、(288頁7行目 行為の及ぶ相手 履中天皇)

- ⑲ 因堅奏而、(290頁12行目 行為の及ぶ相手 允恭天皇)

- ⑳ 於是若日下部王、令奏天皇、(308頁8行目 行為の及ぶ相手 雄略天皇)

- ㉑ 遣人之時、其伊呂兄意祁命奏言、(330頁13頁 行為の及ぶ相手 顯宗天皇)

- ㉒ 還上復奏言、(332頁2行目 行為の及ぶ対象 顯宗天皇)

これらの用例で使用された「奏」は、全て「神や天皇に申し上げる」という意味である。このように、源氏物語に使用された「奏す」の意味と古事記の「奏」の意味とは、

かなり共通点が認められる。よって、源氏物語の「奏す」は、古事記の「奏」の使い方にある程度沿っているといってもよいであろう。ただし、「管弦を奏する」という意味での「奏」は古事記には使用されていない。

3 誦^④

源氏物語には、「誦す」が四十八例認められる。そのうちの一例を示す。

・御かはらけまいりて「ゑいのかなしび涙そく春のさかづきのうち」ともろこゑにずし給。(須磨 大成433頁8行目)

右の例は、源氏と三位の中將とが声を合わせて漢詩を吟唱している場面である。ここでの「誦す」は、そらんじていた漢詩の一節を口ずさむことを意味している。源氏物語の「誦す」は、例のような「漢詩」のほか、「和歌」「経」などが対象となっている。いずれの例も、「そらんじているものを口ずさむ」という意味で解釈できる。一方、古事記に「誦」は三例認められる。

- ① 為人聰明、度目誦口、拂耳勒心。(46頁4行目)
② 即、勅語阿礼、令誦習帝皇日繼及先代旧辞。(46頁5行目)

③以和銅四年九月十八日、詔臣安萬侶、撰錄稗田阿礼所誦之勅語旧辞以献上者、謹随詔旨、子細採摭、(46頁12行目)

①の例は、大系本では、「人と為り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に払るれば心に勅しき」と読まれている。

内容は、一見ただけですぐさま文章を覚えることができる阿礼の聰明さを表していて、「誦」の意味は「そらんじているものを口ずさむ」と解釈できる。他の例②③の「誦」も、①と同じ意味である。従って、源氏物語の「誦す」の意味と古事記の「誦」の意味は、同じ意味であるということになる。

4 具⁽⁵⁾

源氏物語には、「具す」が三十六例認められ、いくつかの意味で使用されている。

①ち、の大納言はなくなりて、は、北の方なん、いにしへの人のよしあるにて、おやうちぐし、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたうおとらず、なにごととのぎしきをもてなしたまひけれど(桐壺 大成5頁3行目)

②はかなきあだ事をもまことの大事をも、いひあはせたるにかひなからず、たつた姫といはむにもつきならず、た

なばたのてにもおとるまじく、そのかたもぐして、うるさくなむ侍し。(帚木 大成52頁12行目)

③このさまくのよきかぎりをとるぐし、なんずべきくさはひませぬ人は、いづこにかはあらむ。(帚木 大成58頁9行目)

④したしきけいしもぐして、しろしめすべきさまどもの給ひあづく。(須磨 大成406頁7行目)

⑤あやまちなけれど、さるべきにこそかゝることもあらめと思に、ましておもふ人ぐするは、れいなきことなるを、ひたおもむきにものくるほしき世にて、たちまさることもありなん(須磨 大成403頁5行目)

⑥さ月まつ花たちばなの、はなもみもぐしてをしおれるかほりおぼゆ。(若菜下 大成484頁8行目)

⑦しらぬ人にぐしてさるみちのありきをしたらんよ。(手習 大成200頁3行目)

①の「おやうちぐし」とは、「両親が揃って」という意味である。②の「そのかたもぐして」とは、「染色の才能・裁縫の才能という方面も備わって」という意味である。③の「このさまくのよきかぎりをとるぐし」とは、「様々の女性の良いところだけを取り揃えて」という意味である。④の「したしきけいしもぐして」とは、「少納言に家司たち

を付けて」という意味である。⑤の「おもふ人ぐするは」とは、「思う人を伴っていくのは」という意味である。⑥の「はなもみもぐして」とは、「花も実も一緒にして」という意味である。⑦の「しらぬ人にぐして」とは、「知らない人に付いて」という意味である。このように「具す」には、「揃う」「備わる」（以上、自動詞用法）「揃える」「付ける」「伴う」「一緒にする」「付く」（以上、他動詞用法）といった複数の意味がある。これに対して、古事記の「具」は、四例が認められる。

①爾大氣都比売、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、為穢汚而奉進、乃殺其大宜津比売神。（84頁3行目）

②即於内率入而、美智皮之疊敷八重、亦絶疊八重敷其上、坐其上而、具百取机代物、為御饗、即令婚其女豊玉毘売。（138頁10行目）

③於倭還上之時、因疑人心、一具喪船、御子載其喪船、先令言漏之御子既崩。（232頁9行目）

④更為其兄王渡河之時、具飭船楫者、（250頁6行目）

①の例は、大系本では、「爾に大氣都比売、鼻口及尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひて、穢汚して奉進ると為

ひて、乃ち其の大宜津比売神を殺しき」と読まれている。ここでの「具」は、「準備し整える」といったような意味である。②③④の「具」も、全て「準備し整える」という意味である。源氏物語の「具す」が、複数の意味で使われているのに対して、古事記の「具」は一つの意味でしか使われていない。古事記の「具」は源氏物語の「揃える」という意味の「具す」に最も近いようである。

5 怨^⑥

源氏物語には、「怨す」は三十四例認められる。そのうちの二例を次に示す。

①「そのうちとけてかたはらいたしとおぼされんこそゆかしけれ。をしなべたるおほかたのは、かずならねど、ほどくにつけて、かきかはしつゝもみ侍なん。をのがじ、うらめしきおりく、まぢかほならむゆふぐれなどのこそ、み所はあらめ」とゑんずれば、（帚木 大成36頁12行目）

②又、さもこそあらめ、おとゞの、ものゝ心をふかうしり給ながら、われをえんじて、かつめてわたしたまふこと。

（少女 大成690頁6行目）

①の「ゑんずれば」は、「恨み言を言うので」といった意

味であり、ここでは、恋の手紙を見せてくれないということとで頭中将が源氏に對してとった行動を表している。②の例は、大宮の会話文中から抜き出したもので、「えんじて」は、「(内大臣が私を) 怨んで」といった意味で、ここは、大宮のもとにいる雲居雁を内大臣が引き取るのは自分を怨んでいるからだと言ふ場面である。このように、「怨ず」は、「恨み言を言う」といった意味や、「怨む」といった意味で使われている。これに對して、古事記の「怨」は、次の二例が認められる。

①若恨怨其為然之事而、攻戰者、出塩盈珠而溺、(140頁11行目)

②天皇、深怨殺其父王之大長谷天皇、欲報其靈。(330頁12行目)

①の例は、大系本では、「若し其れ然^{しか}為たまふ事を恨^{うら}みて攻め戦はば、塩盈珠を出して溺らし」と読まれている。ここでの「怨」は「うらむ」という意味で使用されている。ただし、①の「怨」は戦になるような深い怨みであり、②もまた、「父王を殺された深い怨み」である。これに對して、源氏物語の「怨ず」も、相手を「怨む」という意義特徴を含んでいるが、多くは男女の恋に関する怨みについて相手に不平不満をいう程度のものであつて、古事記の

「怨」とは、深刻さに違いがある。源氏物語の「怨ず」には、相手に對して報復せざるを得ないような深刻さは認められない。よつて、源氏物語の「怨ず」と古事記の「怨」は、ほぼ同じ意味であるとはいえるものの、完全に同じであるとは言えないようである。

6 調

源氏物語に「調ず」は十五例認められる。そのうちの三例を次に示す。

①ながめはれまなきころ、内の御ものいみさしつゝきて、いとゞなかなるさぶらひ給を、大殿にはおほつかなくうらめしくおぼしたれど、よろづの御よそひ、なにくれとめづらしきさまにてうじいで給つゝ、御むすこの君たち、たゞこの御とのゐどころに宮づかへをつとめ給ふ。(帚木35頁12行目)

②さすがにいみじうてうぜられて、心くるしげに泣きわびて、「すこしゆるべ給へや。大將にきこゆべき事あり」とのたまふ。(葵 大成297頁14行目)

③したしき殿上人あまたさぶらひて、にしかはより奉れるあゆ、ちかきかはのいしぶしやうのもの、おまゑにて、うじてまいらす。(常夏 大成829頁3行目)

①の「てうじいで給つ」とは、「お調えになり」といった意味であり、ここは、「左大臣邸では源氏のために一切の御装束をあれやこれやとすばらしい様にお調えになり、御

子息たちは帝のためよりも源氏のために出仕していらいっしやる」といった内容である。②の「てうぜられて」は、「調伏させられて」という意味で、ここは、御息所の物の怪が祈禱によって調伏させられ、「すこし調伏をゆるめてほしい、源氏に申し上げたいことがある」と嘆願する場面である。③の「てうじてまいらす」とは、「調理して源氏にお勧めする」といった意味で、ここは、「親しい殿上人たちが、西川からさしあげた鮎や、近くの川の石伏のようなものを、源氏の御前で調理する」といった内容である。このように、源氏物語の「調ず」は、「調度類を」調え準備する「〔物の怪を〕調伏する」「調理する」といった意味で使われている。これに対して古事記の「調」は、次の一例が認められる。

①如調八絃琴、所治賜天下、(324頁5行目)

この用例の意味は、「八弦の琴の調子を調えるように、天下を調え治める」というものである。ここでの「調」は、「調律する」といった意味である。従って、源氏物語の「調ず」と古事記の「調」は意味が異なっているといえる。

7 制

源氏物語に「制す」は十二例認められる。そのうちの二例を次に示す。

①いさ、かものいふをもせいす。(少女 大成671頁3行目)

②あな、うたてとおほして、御ともの人のさきほふをも、てかきせいし給ふて、なをつまどのほそめなるより、さうしのあきあひたるをみいれたまふ。(常夏 大成843頁6行目)

①は、「博士たちは、人がちよつとものを言っても制止する」という意味である。②の「てかきせいし給ふて」は、「手で合図してお止めになって」という意味で、ここは、滑稽なしぐさをしている近江の君に、自分が来てそつと覗いていることを知られまいと内大臣が手で合図をして前駆に先払いの声を立てることを止めている場面である。このように、「制す」は、「注意して相手の行動をとどめる」といった意味で使われている。これに対して古事記の「制」は、一例認められる。

①定境開邦、制于近淡海、正姓撰氏、勒于遠飛鳥。(42頁10行目)

この用例の意味は、「(天皇は)近江の志賀高穴穗の宮で天下を治められた」というものである。先に述べたよう

に、源氏物語の「制す」は、「注意して相手の行動をとどめる」という意味であり、これに対して、古事記の「制」の意味は「治める」であるから、両者の意味は異なっているということになる。

8 請

源氏物語に「請ず」は八例認められる。そのうちの二例を次に示す。

①の、しりさはぐほど、夜中ばかりなれば、山のぞす、なにくれのそつづたちもえさうじあへ給はず。(葵 大成303頁10行目)

②兵部卿の宮、左の大臣どの、のりゆみのかへりたち、すまゐのあるじなどにはおはしまししを思ひて、けふのひかりとさうじたてまつり給けれどおはします。 (竹河 大成150頁2行目)

①の「さうじあへ給はず」は、「お招きしようとして、それができない」という意味である。行為の及ぶ対象は、「山の座主、僧都たち」である。②の「さうじたてまつり給けれど」は、「お招き申し上げられたけれども」という意味で、紅梅右大臣が勾宮を賓客として招待しようと考えてる場面である。このように、「請ず」は「(人を) 招く」という

意味である。行為の及ぶ対象は、八例のうち六例が山の座主、行者といった僧侶で、残りの二例が宮人(二例とも勾宮)である。これに対して古事記の「請」は、十三例が認められる。

①即共参上、請天神之命。(54頁7行目)

②然者請天照大御神將罷、(74頁1行目)

③故、以為請將罷往之状参上耳。(74頁12行目)

④爾其御祖命、哭患而、参上于天、請神産巢日之命時、(94頁4行目)

⑤告而、更還上、請于天照大神。(112頁3行目)

⑥故、請。(132頁12行目)

⑦若其愁請者、出塩乾珠而活、如此令怱苦云、(140頁12行目)

⑧将攻之時、出塩盈珠而令溺、其愁請者、出塩乾珠而救、(142頁9行目)

⑨故、大毘古命、更還参上、請於天皇時、天皇答詔之、(184頁2行目)

⑩天皇控御琴而、建内宿禰大臣居於沙庭、請神之命。(228頁3行目)

⑪爾具請之、今如此言教之大神者、(230頁3行目)

⑫即詔告建内宿禰大臣、是日向喚上之髮長比売者、請白

天皇之大御所而、(244頁7行目)

⑬爾建内宿禰大臣、請大命者、(244頁8行目)

これらの用例で使用された「請」の意味は、次のようになる。①⑩⑪⑫⑬は「意見を」求める」という意味で、大系本ではこれを「請ふ」と読んでゐる。②③④⑤⑥⑦⑧⑨の「請」は「事情を」申し上げる」という意味で、大系本ではこれを「請す」と読んでゐる。このように古事記における「請」には「意見を」求める」という意味と「事情を」申し上げる」という意味とがある。こうみると古事記の「請」には使い方が二通りあるようであるが、いずれも、相手(神・天皇)に事情を申し上げ、意見を求めるという一連の過程の中で「請」をとらえることができる。「請ふ」は、申し上げる話の内容に重点が置かれているのに対して、「請す」は申し上げるといふ行動に重点が置かれていると考えれば、二つの「請」の意味はさほど隔たったものではないといえよう。さて、このような古事記の「請」の使い方と、源氏物語の「請ず」の「請」の使い方とを比較すると、どうであろうか。源氏物語の「請ず」は、「人などを」まねく」という意味であり、古事記の「請」の意味とは異なっているようである。源氏物語の「請ず」の意味を、「相手に事情を申し上げて、お招きする」というように

考えれば、古事記の「請」の意味と少し近くなってくるが、やはり源氏物語の「請ず」は招くということに意味の中心があると考えるべきであろう。従つて、古事記の「請」と源氏物語の「請ず」の「請」とは、意味を異にしていると考えられる。

9 信^⑦

源氏物語に「信ず」は七例認められる。そのうちの二例を次に示す。

①いぬるついたちのひの夢に、さまことなる物のつげしら
すること侍しかば、しむじがたき事とおもふ給へしかど、
(明石 大成449頁3行目)

②いかやうなる、たちまちに、いひしらぬことありてか、
さるわざはし給はむ。われなむえしむずまじき。(蜻蛉
大成153頁5行目)

①の「しむじがたき事」とは、文字通り「信じられないこと」という意味で、ここでは明石の入道の夢に異様な姿の者が現れて知らせてくれたことについて、それが入道にとつて信じられなかったという内容である。ここでの主体は「明石の入道」、行為の対象は「夢に出てきた者の話」である。②の「えしむずまじき」も、文字通り「信じること

ができない」という意味であり、ここは薫が浮舟の入水のことを知って驚いている場面である。ここでの主体は薫であり、行為の対象は「右近の話」である。行為の対象としては、七例の用例のうち、「夢に出てくる者の話」が三例、「官人の話」が二例、「法師の話」が一例、「物の怪の話」が一例である。この内訳が有意的なものであるか否かは俄には判じられないが、現実の人ではない者の話（夢にでてくる異様な姿の者、物の怪）が、四例を占めていることは注目される。いずれの例も、聞かされた本人にとっては現実にはあり得ないことのように驚かされる内容であること、「信じがたき」や「信ずまじき」といった実現困難や否定の表現が多いことからすると、「信ず」の意味が、例えば単に「相手の話を真にうける」といったようなことではなく、到底受け入れられない内容を受け入れるといったような、もっと強い意味であることを伺わせる。これに対して古事記の「信」は、一例認められる。

① 於是其將軍既信詐、弭弓藏兵。（234頁5行目）

この意味は、「伊佐比宿祢が詐りを真にうけて、弓の弦をはずし、兵をおさめた」というものである。ここでの「信」の意味は、「真にうける・本当だと思ふ」である。先に述べたように、源氏物語の「信ず」は、驚くべき内容の話を聞

かされた時に使われているのだが、古事記の「信」には「真にうけて」といったような意味であって、両者の意味に関連性が認められるものの、完全に意味が一致するとは言えないようである。

10 興

源氏物語に「興ず」は四例認められる。そのうちの二例を次に示す。

① やうくくれば、風に風ふかずかしこき日なりとけうじて、弁の君もえしづめずたちまじれば、（若菜上 大成112

頁5行目）

② 「げに、いとうつくしげなるねこなりけり」と人々けうずるを、衛門督は、たづねんとおぼしたりきと御けしきをみて、日ごろへてまいりたまへり。（若菜下 大成117頁12行目）

①は、弁の君が、暮れの風の吹かない好都合な日なので、興に乗って蹴鞠りの仲間入りをするという内容である。②は、「かわいい猫だ」と人々が興じ合っているという内容である。いずれも、「興ず」は眼前のある事柄（①は天候の状態、②は猫のかわいらしさ）に刺激を受けて心理的に盛り上がり、複数で行っているある行為（①蹴鞠 ②猫

と遊ぶこと」が活発になることを意味している。ここに掲げていない他の例も、同じように解釈できる。これに対し古事記の「興」は次の十二例である。

① 雖然久美度邇、興而生子、水蛭子。(54頁4行目)

② 此時、登美能那賀須泥毘古、興軍待向以戰。(150頁2行目)

③ 伯父、興軍宜行。(184頁4行目)

④ 其建波邇安王、興軍待遮、(184頁6行目)

⑤ 興軍擊沙本毘古王之時、其王作稻城以待戰。(190頁12行目)

⑥ 自其入幸、渡走水海之時、其渡神興浪、廻船不得進渡。(214頁3行目)

⑦ 其弟忍態王、不畏其態、興軍待向之時、赴喪船、(232頁13行目)

⑧ 於是伏隱河辺之兵、彼廂此廂、一時共興、矢刺而流。(252頁4行目)

⑨ 天皇聞此歌、即興軍欲殺。(278頁7行目)

⑩ 於是穴穗御子、興軍圍大前小前宿禰之家。(294頁1行目)

⑪ 亦興軍圍都夫良意美之家。而興軍待戰、(302頁5行目)

⑫ 即興軍圍志毘臣之家、乃殺也。(326頁16行目)

これらの用例で使用された「興」の意味は次のようになる。①の「興」は、「事を始めて」という意味で、②③④⑤

⑦⑨⑩⑪⑫の「興」はいずれも「軍を興す」という表現で、「準備し、動かす」という意味である。また、⑥の「興」は「浪を興す」という表現で、「発生させる」といった意味に解される。いずれも、ある行動を起こしたり、あるものを発生させたりといった意味である。また、⑧の「興」は自動詞として使われており、「兵、興りて」という表現で「蜂起する」という意味である。先に述べたように、源氏物語の「興ず」は、眼前のある事柄に刺激を受けて心理的に盛り上がり、複数で行っているある行為が活発になることを意味していたが、一方、古事記の「興」は「軍を興す」という使い方からもわかるように、行動を引き起こすという意味である。活動が活発になる方向へと動作が変化するという点では、源氏物語の「興ず」の「興」も、古事記の「興」も意味が共通しているといえなくもないが、源氏物語の「興ず」は、心理的な盛り上がりに基づいた行動の変化であり、古事記の「興」は「軍を準備し動かす」といった行動のみの変化をいうことからすると、両者の意味の違いは大きいものといえよう。

11 辞

源氏物語に「辞す」は三例認められ、全て「職を退く」

という意味で用いられている。

・きさらぎのついたちころになおしものとかいふことに権大納言になり給て右大将かけ給つ。右のおほいどのひだりにておはしけるがじ、給へる所なりけり。(宿木 大成 170頁5行目)

右の「じ」は、「職を退く」という意味で、ここでは「中納言は権大納言におなりになって右大将を兼ねられることになった。これは右大将を兼ねておいでになった右大臣殿が辞任なさったからだ」という内容である。これに對して古事記の「辞」は四例認められる。

①爾兄辞令貢於弟、弟辞令貢於兄、(252頁16行目)

②天皇辞而詔之、(290頁11行目)

③故、不得辞而、(328頁2行目)

これらの用例で使用された「辞」の意味は、次のとおりである。①は「貢ぎ物を受け取ることを」辞退する、②③は「皇位につくことを」辞退する」という意味である。いずれも、「辞退する」すなわち「相手からの何らかの申し出を断る」という意味である。一方、源氏物語の「辞す」は、「一旦就いていた職から退く」という意味である。この「職から退く」という意味を、「自分の意志により職を辞退する」というように解釈すれば、古事記の「辞」の意味と

通じないこともないが、やはり古事記の「辞」と源氏物語の「辞す」の「辞」は意味に差があると考える方が妥当であろう。源氏物語の「辞す」が官職に関することのみに使われていることも、古事記の「辞」との違いであるといえよう。

12 拝

源氏物語に「拝す」は三例認められる。このうちの一例を次に示す。

・おまへの庭にてはいし^{たてまつりたまふ}。(竹河 大成 497頁9行目)

右の例の「はいし」とは、「再拝して舞踏する」という儀礼的行為をいう。源氏物語の「拝す」は、全てこの意味である。これに對して古事記の「拝」は、次の十五例が認められる。

①此者諸人以^拝竈神者也。(110頁4行目)

②此之鏡者、專為我御魂而、如^拝吾前、伊都岐奉。(126頁14行目)

③此二柱神者、^拝祭佐久久斯侶、伊須受能宮。(128頁1行目)

④然不得聚軍者、欺陽仕奉而、作大殿、於其殿内作押機待

時、弟宇迦斯先參向、拜曰、(154頁11行目)

⑤即以意富多多泥古命、為神主而、於御諸山拜祭意富美和之大神前、(180頁5行目)

⑥故、其御子令拜其大神宮將遣之時、令副誰人者吉。(196頁14行目)

⑦故、科曙立王、令宇氣比白、因拜此大神、誠有驗者、住是鷺巢池之樹鷺乎、(198頁2行目)

⑧故、到於出雲、拜訖大神、還上之時、肥河之中、作黑巢橋、仕奉飯宮而坐。(198頁9行目)

⑨故、受命罷行之時、參入伊勢大御神宮、拜神朝廷、即白其姨倭比売命者、(212頁1行目)

⑩留其山口、即造飯宮、忽為豐樂、乃於其隼人賜大臣位、百官令拜、隼人歡喜、以為遂志。(288頁1行目)

⑪上到于倭詔之、今日留此間、為祓禊而、明日參出、將拜神宮。(288頁6行目)

⑫爾大日下王、四拜白之、「若疑有如此大命。」(298頁9行目)

⑬爾都夫良意美、聞此詔命、自參出、解所佩兵而、八度拜白者、先日所問賜之女子、詞良比売者侍。(302頁8行目)

⑭天皇於是惶畏而白、恐我大神、有宇都志意美者、不覺白而、大御刀及弓矢始而、脫百官人等所服衣服以拜獻。(316

頁10行目)

⑮次佐佐宜王者、拜伊勢神宮也。(336頁11行目)

これらの用例で使用されている「拜」には、「潔斎して護り奉仕する」「身をかがめてお辞儀をする」といった二種類の意味が認められる。「潔斎して護り奉仕する」の意味で使用された例は、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮である。それぞれの行為の対象は、①が「竈神」、②が「天照大御神」、③が「天照大御神の御魂代の鏡と思金神」、④が「天つ神の御子」、⑤が「大三輪の大神」、⑥⑦⑧が「出雲の大神」、⑨⑩⑪が「伊勢の大御神」、⑫⑬⑭⑮が「石上神」である。これらは、全て行為の対象が「神」であるという点で共通している。「身をかがめてお辞儀をする」の意味で使用された例は、⑩⑪⑫⑬⑭⑮である。それぞれの行為の対象は、⑩が「隼人」、⑪が「根臣」、⑬が「長谷谷の王」、⑭⑮が「一言主の大神」である。「身をかがめてお辞儀をする」という意味の「拜」は、動作主と行為の対象とが対峙して問答をする場面に使用され、行為の対象は、人間の場合もあれば神の場合もある。四拜、八拜などは、動作の数までが指定され、これらの例は明らかに「身をかがめてお辞儀をする」という意味の「拜」であるといえよう。ただし、「潔斎して護り奉仕する」意味とした十一例の中にも、「身をかがめてお辞儀をする」

という意味に解釈できるような例もあり、両者の意味の判定は、難しい場合も存する。尚、大系本では、「拝」を「いつく」「をろがむ」と二様に読んでいるが、これらは先に掲げた二つの意味とは必ずしも対応しないようである。ここで、このような古事記の「拝」の意味と、源氏物語の「拝す」の意味とを比べると、「身をかがめてお辞儀をする」という意味で両者は共通している。「潔斎して護り奉仕する」という意味は、古事記の「拝」の方にのみ認められるものである。

13 感

源氏物語に、「感ず」は次の一例が認められる。

・それを、こしきふ卿の宮のいみじきものにし給けるを、かのゑもんのかみは、わらはよりいとことなるねをふきいでしにかんじて、かの宮のはぎのえんせられける日、をくり物にとらせ給へるなり。(横笛 1285頁3行目)

右の例は、柏木が小さい頃からすばらしい音色で笛を吹いたことに感心して、故式部卿宮が大切にしていた横笛を柏木に送ったという内容である。ここでの「感ず」は、「感心する」と口語訳できるようなものである。これに対して古事記の「感」は次の四例である。

①爾豊玉毘売命、思奇、出見、乃見感、目合而、(138頁7行目)

②故、美和之大物主神見感而、(160頁13行目)

③故、相感、共婚共住之間、未經幾時、其美人妊身。(180頁12行目)

④爾熊曾建兄弟二人、見感其嬖子、坐於己中而盛樂。(208頁5行目)

①の例は「豊玉毘売命が、虚空津日高の麗しい姿をみて、心を動かされて」という内容である。ここでの「感」は、「心を動かされる」という意味である。他の例、②③④も全て、「麗しい姿を見て、心が動かされた」という内容で、「感」の意味は①と同じである。このように古事記の「感」は、「心を動かされる」という意味で、いずれも異性の麗しい姿を目にしての場面で使用されるという特徴をもっている。源氏物語の「感ず」も、古事記の「感」も「心を動かされる」という意味であるという点では、共通していると考えてよいであろう。

14 死⁸⁾

源氏物語に「死す」は次の一例が認められる。

・そのころの右大将やまゐしてしし給けるをこの中納言に

御賀の程よろこびくはへんとおぼしめしてにはかになさせ給つ。(若菜上 大成104頁3行目)

右の「しし給けるを」とは、「死になさったので」という意味で、ここは右大將が病氣のために死になさったので帝は夕霧を中納言兼右大臣に任命したという内容である。ただし、平仮名で「しし」とあるが、それを「死し」ではなく、「辞し」とも解される。「辞し」と解すれば、「右大將が病氣のため職を退きなさつので」という内容になる。このように、「しし」を「辞し」と解すると、源氏物語には「死す」が一例も使用されていないことになる。一方、古事記には、「死」が二十一例認められる。

- ① 是以一日必千人死、一日必千五百人生也。(66頁10行目)
- ② 即於其石所燒著而死。(94頁3行目)
- ③ 其父大神者、思已死訖、(96頁12行目)
- ④ 云而、取其矢、自其矢穴衝返下者、中天若日子寢朝床之高胸坂以死。(116頁3行目)
- ⑤ 皆哭云、我子者不死有祁理。(116頁11行目)
- ⑥ 我君者不死坐祁理云、(116頁12行目)
- ⑦ 負賤奴之手乎死、(150頁8行目)
- ⑧ 乃已所作押見打而死。爾即控出斬散。(156頁5行目)
- ⑨ 此天皇之御世、役病多起、人民死為尽。(178頁12行目)

⑩ 於是國夫玖命彈矢者、即射建波邇安王而死。(184頁9行目)

⑪ 如此詔之時、宇氣比其鷺墮地死。(198頁3行目)

⑫ 是甚慚而、到山代國之相樂時、取懸樹枝而欲死。(200頁12行目)

⑬ 又到弟國之時、遂墮峻淵而死。(200頁13行目)

⑭ 叫哭以白、常世國之登岐士玖能迦玖能木実、持參上侍、遂叫哭死也。(202頁6行目)

⑮ 即白其姨倭比売命者、天皇既所以思吾死乎、(212頁2行目)

⑯ 因此思惟、猶所思看吾既死焉。(212頁4行目)

⑰ 即入海共死也。(234頁11行目)

⑱ 即共自死。(298頁5行目)

⑲ 至埋腰時、兩目走拔而死。(302頁4行目)

⑳ 然特已入坐于隨家之王子者、死而不棄。(302頁12行目)

㉑ 故、以刀刺殺其王子、乃切己頸以死也。(304頁3行目)

これらの用例で使用された「死」の意味は、いずれも「死ぬ」である。「死」の主体を考えてみると、たとえば①や⑨などは「人民」が主体であり、⑳㉑などは「王子」が主体である。また、③のように主体が「神」の場合もある。従って、主体に身分上の制約はなさそうである。さら

に、①の「死」の主体は、驚であつて、人間ではない。古事記の「死」と源氏物語の「死す」の「死」の意味を比較してみると、両者「死ぬ」という同じ意味であるといえる。

15 動

源氏物語に「動ず」は、次の一例が認められる。

・ひきうごかしつばかりきこえあへるものと心うくうとましくて、どうぜられ給はず。(総角 大成10頁5行目)

右の「どうぜられたまはず」とは、「(薫の申し出に) 応じようとはなさらない」という意味で、ここは、「薫から浮舟に対して会いたいという申し出があり、女房たちも強引にその誘いに彼女を引き込もうとするのだが、浮舟はそれに応じようとはしない」という内容である。ここでの「動ず」の意味は、「相手からの誘いに応えて、行動を起こす」といった意味であろうか。これに対して古事記の「動」は、次の六例が認められる。

①乃參上天時、山川悉動、國土皆震。(74頁2行目)

②爾高天原動而、八百萬神共咲。(82頁5行目)

③逃出之時、其天詔琴、拂樹而地動鳴。(98頁7行目)

④我之女二並立奉由者、使石長比売者、天神御子之命、雖雪零風吹、恒如石而、常堅不動坐。(132頁7行目)

⑤於是言動為御室樂、設備食物。(208頁1行目)

⑥爾其熊曾建白言、莫動其刀。(208頁8行目)

これらの用例のうち、①②③の「動」の意味は、「鳴り響く」である。その主体は、①が「山川」、②が「高天原」、③が「地」である。④の「動」の意味は、「動く」である。主体は、「天神」で、ここではそれが「石」に例えられている。⑤の「動」は「言い騒ぐ」という意味である。主体は、「熊曾建」である。⑥の「動」は、「動かす」といった意味で、他動詞として使われたものである。主体は「小碓命」、動作の及ぶ対象は「刀」である。このように、古事記での「動」は大きく分けると二つの意味、すなわち「鳴り響く」「言い騒ぐ」といったような音の発生に関わる意味と「動く」といったような運動に関わる意味で使用されている。大系本によれば、前者の「動」は「とよむ」と読まれ、後者の「動」は「うごく・うごかす」と読まれている。ここで、音の発生に関わる「動」の用例①②③⑤の意味をもう少し検討すると、いずれも音のことを意味しているが、全て動きをともなった音であるといえよう。①は、須佐之男命が天に登ることに共鳴して、小川が震動し、そこから音が発生するのである。この用例で、「動」が「國土皆震」の「震」と対になっているのも、「動」が動きをも表現

していることを示していよう。②は、八百萬の神が笑うことに共鳴して、高天の原が震え、音を出すといったように解釈できるし、③も天の詔琴が樹に触れることによって、地が震え、音が出るのであろう。⑤は一人一人の言動が一つになって共鳴している状態をいうのであろう。このように、「動」には音に関する意味と運動に関する意味があるのであるが、いずれも「運動」という観点からすれば、共通部分が存するということになる。これに対して源氏物語の「動ず」は、先に述べたように「相手からの誘いに応えて、行動を起こす」という意味であり、古事記の「動」の意味とは異なっている。もともと、「運動」という観点からすれば、共通部分も認められなくはないが、古事記は「鳴り響く」、「動ず」は「行動する」ということであるから、やはり違う意味として捉えるべきであらう。

16 服

源氏物語に「服す」は一例認められる。

・月ごろふひやうおもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをふくして、いとくさきによりなん、えたいめむたまはらぬ。(帚木 大成60頁8行目)

右の「ふくして」は、「服用して」という意味で、ここ

は、「ここ二三ヶ月、病気が重いのを我慢しかねて、極熱の薬を服用して、大変臭いので対面できません」という内容である。これに対して古事記の「服」は、次の八例が認められる。

- ①爾臨其樂日、如童女之髪、梳垂其結御髪、服其姨之御衣御裳、(208頁3行目)
- ②即絶弓絃、欺陽婦服。(234頁5行目)
- ③其王子者、服布衣裪、(250頁7行目)
- ④於是其兄王、隱伏兵士、衣中服鎧、(250頁8行目)
- ⑤其臣服著紅紐青摺衣。(274頁1行目)
- ⑥即衣中服甲、(304頁11行目)
- ⑦爾赤猪子之泣淚、悉湿其所服之丹指袖。(312頁8行目)
- ⑧大御刀及弓矢始而、脱百官人等所服衣服以拜獻。(316頁10行目)

これらの用例で使用されている「服」の意味は、「着る」「服従する」である。「着る」の意味としては、①③④⑤⑥⑦⑧の例がこれにあたり、「服従する」の意味としては、②の例がこれにあたる。ただし、これは「婦服」という二字で使用されたものである。大系本ではこれを「まつろふ」と読んでいる。このように古事記の「服」は、単独の一字では「着る」という意味で使用されている。これに対して、

源氏物語の「服す」は、先に述べたように、「(葉を)服用する」という意味であるから、古事記の「服」とは意味が違っているといえる。

17 用

源氏物語に「用す」は一例認められる。

・御むすめをはようせさせ給君たちあらじ (東屋 大成 185 頁3行目)

右の例の「ようせさせ給⁽⁹⁾」とは、「妻として」必要になさる」という意味で、ここは、中将の君が自分の娘である浮舟と左近少将との縁談を進めていることに対して、左近少将には自分の娘と結婚させたいと考えていた常陸介が皮肉を言っている場面である。先の用例は、「あなた(中将の君)の御娘をもらってくださるような君達はいないだろう」という意味で、血筋は立派でも財力がなければ結婚はできないと常陸介が皮肉を言っているのである。これに対して古事記の「用」は、次の三例が認められる。

①是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録。
(48頁2行目)

②此神者、坐近淡海國之日枝山、亦坐葛野之松尾、用鳴鐘神者也。(110頁6行目)

③爾火遠理命、謂其兄火照命、各相易佐知欲用、(134頁8行目)

これらの用例で使用されている「用」の意味は、「用いる」である。①は「音訓を交えて用いる」という内容であり、②は「大山昨神は鳴鐘を用いる神である」という内容、③は「獲物を捕る道具を代えて用いよう」という内容である。このように古事記の「用」は全て「用いる」という意味で使われている。古事記の「用」の意味と源氏物語の「用す」の意味を比較すると、前者が「用いる」、後者が「必要とする」といった意味になることから、両者の意味は異なっていると考えられそうである。

18 論

源氏物語の「論ず」は一例認められる。

・この人々のとりどりにろむずるをきこしめして、ひだりみぎとかたはかたせ給ふ。(総合 大成564頁10行目)

右の「ろむずる」は「議論する」という意味で、ここは

「帝つきの女房たちがそれぞれ議論するのを聞きになって左右に組をお分けになる」という内容である。これに対して古事記の「論」は、次の一例が認められる。

①議安河而平天下、論小濱而清國土。(42頁6行目)

①は、「万の神が出雲の小濱で大国主の神と議論する」という内容で、ここでの「論」は「議論する」という意味である。従って、古事記の「論」と源氏物語の「論ず」には、意味に大きな差はないことになる。

19 和

源氏物語に「和す」は一例認められる。

・あめのうちふりたるなごりの、いとものしめやかなるゆふつかた、御まへのわか、えでかしわざなどの、あをやかにしげりあひたるが、なにとなく心ちよげなるそらをみいだし給ひて、「わしてまたきよし」とうちずじ給うて、まづこのひめ君の御さまのにはひやかげさをおぼしんでられて、れいの忍びやかにわたり給へり。(胡蝶大成795頁8行目)

右の「わして」は、「和やかで」といった意味で、ここは源氏が白氏文集の一節を暗誦している場面である。この「和す」の例は、白氏文集の引用であるから、日本語を表記するために使われた和語化した漢語サ変動詞とはいえないかもしれない。ここでの「和す」は、旧暦の四月の天氣の穏やかさを表現している。これに対して古事記の「和」は、次の八例が認められる。

①故、建御雷神、返参上、復奏言向和平葦原中國之状。(124頁9行目)

②故、如此言向平和荒夫琉神等、(160頁7行目)

③大吉備津日子命與若建吉備津日子命、二柱相副而、於針間水河之前、居忌瓮而、針間為道口以言向和吉備國也。(170頁15行目)

④又此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴人等。(182頁8行目)

⑤然而還上之時、山神、河神、及穴戸神、皆言向和而参上。(210頁3行目)

⑥爾天皇、亦頻詔倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人而、(210頁13行目)

⑦乃雖思將婚、亦思還上之時將婚、期定而幸于東國、悉言向和平山河荒神、及不伏人等。(212頁9行目)

⑧亦平和山河荒神等而、(214頁12行目)

これらの用例で使用されている「和」の意味は、「おだやかにする」であろう。用例のうち①②③④⑤⑥⑦は「言向」とともに使われたもので、これらは「言葉の力によって混乱していたものをおだやかにする」という意味である。また、古事記の「和」は、①②④⑥⑦⑧のように、その多く

が「和平」「平和」の二字で使用されている。これらの「平」は、治安等が無事で安定していることを表している。いずれにしても、古事記の全ての「和」は、「おだやかにする」といった意味で解釈できよう。先に述べた源氏物語の「和す」と比較すると、同じ様な意味であるといえよう。ただし、古事記では「おだやかになる」ものが「国家」であるのに対して、源氏物語は「天気」であるといった違いはある。もつとも、源氏物語の一例の「和す」は、白氏文集の一節を引用した中の例であって、これを源氏物語の「和す」の用例として良いかどうかということは、問題があるといえよう。

おわりに

以上、源氏物語の一字漢語サ変動詞形成漢字三十六種のうち、古事記にも動詞として使用されている十九種について、それぞれ意味用法の検討を行ってきた。結果、これら十九種において、古事記の意味用法と源氏物語の意味用法とがどのように関わっているのかをまとめると次のようになる。

1 古事記と源氏物語で意味用法に大きな差のないもの

「誦」「感」「死」「論」「和」

2 古事記と源氏物語で意味用法に大きな差はないが、明らかに異なる部分を含んでいるもの

「念」「奏」「具」「怨」「信」「押」

3 古事記と源氏物語で意味用法に大きな差のあるもの

「興」「請」「辞」「制」「調」「動」「服」「用」

古事記と源氏物語における一字漢語サ変動詞形式漢字の関係を、「意味用法に大きな差のないもの」と「意味用法に大きな差はないが、明らかに異なる部分を含んでいるもの」と「意味用法に大きな差のあるもの」とに分けると、先に示したようになる。ここで、それぞれについて少し説明を加えたいと思う。

まず、「意味用法に大きな差のないもの」に属する五種の漢字であるが、このうち源氏物語で最も使用数の多い字は「誦」で、全体から見ても「念ず」「奏す」に続いて三番目の多さである。残りの「感」「死」「論」「和」は、それぞれ一例しか使用されていない。このうち、「死」は「辞」の例とも解釈できること、「和」は白氏文集の一節を引用したものであることは既に述べたところである。さて、古事記の「誦」であるが、これは全て古事記の序で使用されたもので、「誦」は、序のような説明的文章を表記する漢字として選択されたのかもしれない。しかし、いずれにしても、上

代において、「誦」には、後代の「誦す」につながるような使い方が既にされていたことになる。古事記から源氏物語へという観点で捉えたと「誦」は除かれるとしても、1の「古事記と源氏物語で意味用法に大きな差のないもの」の字群は、源氏物語にサ変動詞として多くは取り入れられなかったと見るべきであろう。本来なら、意味用法に大きな差がないのであれば、源氏物語にサ変動詞として取り入れやすいように思われるが、実際はそうではなさそうである。次に、2の「古事記と源氏物語で意味用法に大きな差はないが、明らかに異なる部分を含んでいるもの」に属する六種の漢字についてみていく。これらを源氏物語で多く使用されている順に示せば、「念」「奏」「具」「怨」「信」「拝」の順になる。このうち、「念」は使用数において第一位、「奏」は第二位、「具」は第四位、「怨」は第五位であり、2に属する漢字群が、源氏物語における一字漢語サ変動詞形成漢字の上位を占めている。それぞれの漢字の意味用法については先述したことなのでここで詳しく繰り返さないが、敢えて概要のみを示せば次のようになる。「念」は「精神を集中して思う」という意味で両者に使用例が認められるが、「神仏に祈る」「堪える」という意味では古事記に使用例が認められない。「奏」は、「天皇に申し上げる」とい

う意味では両者に使用例が認められるが、「管弦を奏でる」という意味では古事記に使用例が認められない。「具」は、「準備し整える」という古事記での意味と「揃える」という源氏物語での意味とが共通しているが、「揃う」「備わる」「付ける」「伴う」「一緒にする」「付く」という意味では古事記に使用例が認められない。「怨」は、「相手を怨む」という意味で共通しているが、源氏物語の「怨ず」には「口に出して文句を言う」といった意味もあり、また男女間の怨みを表すという傾向もあることから、両者には意味用法上異なる部分が存しているといえる。「信」は「相手の言うことを本当だと思う」という意味であるが、古事記では「相手の話を真に受ける」といった意味合いがあるのに対して、源氏物語は「思いも寄らない驚くべき内容を本当だと思う」といった意味合いがあつて、両者の意味には違いがある。「拝」は、「拝礼する・拝舞する」といった意味の他に、古事記には「(神に対して)潔斎して護り奉仕する」という意味があるが、源氏物語にはそのような意味での使い方はない。このように、2に分類される「念」「奏」「具」「怨」「信」「拝」には、古事記の用例と源氏物語の用例との間に意味上の一致点は見いだせるものの、異なる部分も多く存しているといえよう。これを、古事記から源氏物語へ

という観点で捉えるなら、このように意味上の一致点がありながら、一方で異なる部分も同時に併せ持っているような漢字群が、源氏物語の一字漢語サ変動詞形成漢字として多く取り入れられたことになる。つまり、源氏物語のそれは、古事記での使い方そのままを取り入れたのではなく、物語を表現するのに適した意味を付け加え、或いは整理して取り入れたということになるのでなかろうか。⁽¹⁰⁾この、古事記と源氏物語の漢字の意味の差が、物語を表現する語としての資格を担っている部分ともいえようかと思う。

最後に、3の「古事記と源氏物語で意味用法に大きな差のあるもの」に属する「調」「制」「請」「興」「辞」「動」「服」「用」についてふれておく。これらの漢字は、一字漢語サ変動詞形成漢字として、「調」が十五例、「制」が十二例、「請」が八例使用されており、使用数としては2に属する漢字ほど多くはないものの、比較的多く使用されているといってもよいであろう。これらの漢字を3に分類した理由は、例えば、「調」は古事記では「調律する」という意味であるが、源氏物語では「整え準備する」「調伏する」「調理する」といった具合に、両者の意味に大きな差が認められるからである。他の漢字については、先に述べたところなので、ここでは説明を省略させていただく。さて、これ

らの漢字は、用例数としては比較的多いものの、2に属する漢字群ほどの多さでは使用されない。しかし、漢字の種類としては八種がここに属しており、三つに分類した中で最も多い。従って、古事記と源氏物語で一字漢語サ変動詞形成漢字を比較した場合、意味用法が大きく異なる漢字が字種としては最も多いことになる。このことは、源氏物語で使用される一字漢語サ変動詞形成漢字の意味が必ずしも前代の古事記の意味に沿ったものではないということを示している。両者の間には大きな隔たりがあるといつてよい。このことは、何を示しているのだろうか。

源氏物語の一字漢語サ変動詞形成漢字は、いったいどこからきたのだろうか。仮説として、当初次のようなプロセスを考えてみた。固有の文字を持たなかった日本の古代人は、中国の文字である漢字を使って日本語を表記した。その際、同じような意味を表す多種の漢字の中から、最も適当な語を取捨選択する必要が生じた。例えば「天皇に申し上げる」という意味での「まをす」は、「申」ではなく「奏」を使うといった漢字の選択が行われ、それが日本語の表記において定着した。その結果、「天皇に申し上げる」という意味で使われる「奏」が音読され、漢語としても使用される。そして漢語サ変動詞、「奏す」が生まれた。それ

が、源氏物語のような和文にも使われた、といったようなプロセスである。拙稿の筆者が、ここで古事記との比較を行ったのは、このようなプロセスの可能性を考えてみたことに始まる。しかし、検討の結果からは、このプロセスは、考えにくいといわざるをえない。一字漢語サ変動詞形成漢字における、古事記との関連性が強くは認められないからである。

源氏物語の一字漢語サ変動詞形成漢字はどこからきたのか。先に仮説として掲げたプロセスの他にも、色々な可能性は考えられる。その一つは、漢文訓読の世界で生じたという可能性である。例えば、漢文に「念」が出てきたとき、これを「オモフ」ではなく「念ズ」と漢語サ変動詞で読むことが定着した結果、「念ず」という語が生まれ、それが源氏物語にも使われたというプロセスである。その他には、漢字を使って日本語を表記するという書くという行為、漢文訓読のように訓むという行為とは別に、話すという行為の中で一字漢語サ変動詞が生まれたというプロセスも考えられる。あるいは、それらが相互に複雑に絡み合っているのかもしれない。さらには、語によって、プロセスが違うのかもしれない。そう考えると、残存する限られた文献によって、プロセスを説明すること自体、無理が

あるのかもしれない。しかし、一字漢語サ変動詞形成漢字の意味用法を考えることは、我が国における漢語の受容、漢語の成立という観点からも重要なので、今後検索文献を広げ、さらに様々な角度から、一字漢語サ変動詞形成漢字の問題を検証していきたいと思っている。

注

(1) 漢語サ変動詞とは、漢語にサ変動詞「す」が後接して成立した語をいうのであるが、この漢語の部分には、漢字一字からなる漢語もあれば、漢字二字、あるいはそれ以上からなる漢語もある。ここでは、漢字一字からなるものを、一字漢語サ変動詞と呼ぶこととし、二字以上からなる漢語サ変動詞と区別した。そして、一字漢語サ変動詞のみを対象として考察を進めることにした。漢字二字以上からなる漢語サ変動詞は、漢語の部分で単独で使用されたり、漢語と「す」との間に助詞が入ったりすることから、漢語と「す」の接合の度合いが一字の場合に比べて弱いとみて、ここでは取り上げなかった。加えて、古事記には、二字以上からなる漢語サ変動詞の漢語部分が、ほとんど使用されていないことも理由の一つである。

(2) 「念ズ」に関しては、次のような先行論文がある。

岩下祐一 「念ず」の多義性について」(『國学院雑誌』

78—11 昭和五十二年十二月)

藤原浩史 「漢語サ変動詞『念ず』の表現価値」(『国語学

研究』30 平成二年十二月)

拙稿

「和化漢文における「念」「思」の用字法」

(『広島女学院大学国語国文学誌』第二十六号
平成八年十二月)

(3) 拙稿

「平安・鎌倉時代に於ける『念ス』の意味・用法——「オモフ」と比較して——」(『国文学
攷』129 一九九一年三月)

右の論文では、「祈る」「我慢する」の「念ず」は、意味を異にしているようであるが、「精神を一心に集中して動揺のない状態にする」という意味に於いては一致していること、さらに、「我慢する」の意は「祈る」の意から派生したものであるということを述べた。

(4) 拙稿

「平安・鎌倉時代に於ける『誦ス』の意味用法」(『広島女学院大学日本文学』3 一九九三年七月)

(5) 森下喜一

「『率る』と『具す』について」(『野洲国文学』10 昭和四十七年九月五日)

藤原浩史

「漢語サ変動詞『具ス』の和化過程」(『国語学研究』27 一九八七年十二月)

(6) 藤原浩史

「漢語サ変動詞『怨ず』の意味と表現価値」(『国語学研究』28 一九八八年十二月)

(7) 岩下祐一

「『信ず』の展開 語義から見て」(『昭和学院短期大学紀要』16 一九八〇年二月)

(8) 高橋敬一 「今昔物語集における漢語サ変動詞『死す』の

用法」(『国語国文学研究』28 一九九二年九月)

月)

(9) この箇所の「ようせさせ」は、意味からすると「用ぜさせ」ではなく「要ぜさせ」とも解せないことはない。ただし、その場合は、「要」の音は「えう」であるから、表記が異なることになる。源氏物語の写本は鎌倉時代以降のものであるから、「要」を「えう」とせず、「よう」と表記しているということは考えられることであるし、また転写を重ねるうちに表記を誤ったとも考えられる。いずれにしても、当該例の「ようせ」が「要せ」なのか「用せ」なのかという問題が残っている。もし、ここを、「要す」と考えれば、源氏物語中に「用ず」の例は一例も存在しないということになる。

(10)

古事記が書かれてから源氏物語が書かれるまでの間にはおよそ三百年の歳月が流れており、その間に、和文に取り入れられる一字漢語サ変動詞形成漢字の意味は限定され、洗練されていったのであろう。